



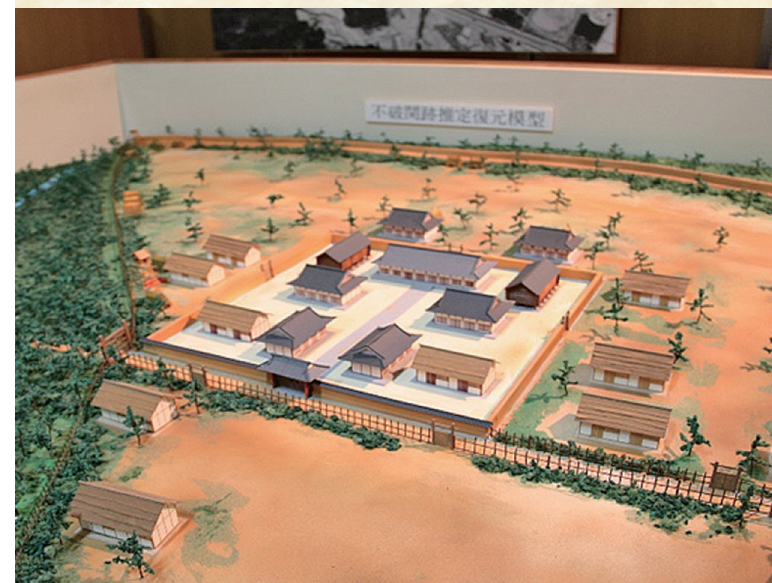
不破関資料館

- ◆休館日／月曜日（休日は開館、翌火曜日休館）
年末年始（12/29～1/3）
- ◆開館時間／4月～10月 … 9時～16時30分
11月～3月 … 9時～16時
- ◆入館料／大人 一人 110円
（団体20名以上 一人70円）
中学生以下 無料
- ◆交通／JR関ヶ原駅より……徒歩約20分
名神関ヶ原ICより……車5分
- ◆駐車場／無料（バス3台、乗用車10台）



古代史上最大の内乱 壬申の乱ゆかりの

関ヶ原町 不破関資料館



〒503-1541

岐阜県不破郡関ヶ原町大字松尾21の1番地

TEL・FAX (0584)43-2611

壬申の乱コース

- 1 兜掛石・靴脱石（大海人皇子が兜を掛け、靴を脱いだ石）
- 2 井上神社（天武天皇を祀る）
- 3 矢尻の井戸（大海人皇子の兵士が矢尻で掘った井戸）
- 4 自害峯（大友皇子の首を葬った場所）
- 5 若宮八幡神社（大友皇子を祀る）
- 6 黒血川（大海人軍と大友軍の戦いで血に染まった）

不破関コース

- 1 北限土塁跡（460mの土塁跡）
- 2 望楼跡（北東角に立つ見張り用の建物跡）
- 3 東城門跡（不破関東側の入口跡）
- 4 南限土塁跡（112mの土塁跡）
- 5 内郭(政庁)跡（複数の瓦葺き建物があった役所跡）
- 6 伝関守跡（不破関停廃後の関守屋敷跡）
- 7 戸佐々神社（不破関を鎮護する神社）

壬申の乱史跡めぐりマップを持って歩いてみよう！

不破関の設置

壬申の乱に勝利した天武天皇は、自らの体験（都から脱出して、争いに勝つ）が二度と起こらないようにするため、畿内と東国の分岐点に関所を設置しました。東海道に「鈴鹿関」、東山道に「不破関」、北陸道に「愛宕関」の三関です。関所が設置された時期ははっきりしていませんが、7世紀末頃には正式に設置されたとされています。

関には、国の役人や兵士が常駐していました。通常は通行を検察するだけでなく、争いが起きたときに関所を閉ざして守る軍事的な働きもありました。

壬申の乱

672年に起きた「壬申の乱」は、古代史上最大の内乱と呼ばれています。天智天皇の弟大海人皇子と息子大友皇子が次の皇位をめぐって骨肉の争いを繰り広げました。その最初の舞台となったのが美濃国西濃地方です。吉野に逃れた大海人皇子は、私領であった味蜂間（あはちま）評を目指しました。美濃に迫り着いた皇子は、和賀野（現在の関ヶ原町）の野上を拠点にして全軍を指揮しました。争いは、大和国や近江国で行われ、大海人皇子軍が大津宮を攻めて勝利しました。大友皇子の亡骸は美濃へ運ばれたそうです。（自害）大友皇子の首を葬った伝承地）大海人皇子は、大和へ凱旋し、80数日間わたる内乱は終わりました。翌年、大海人皇子は即位し「天武天皇」になりました。

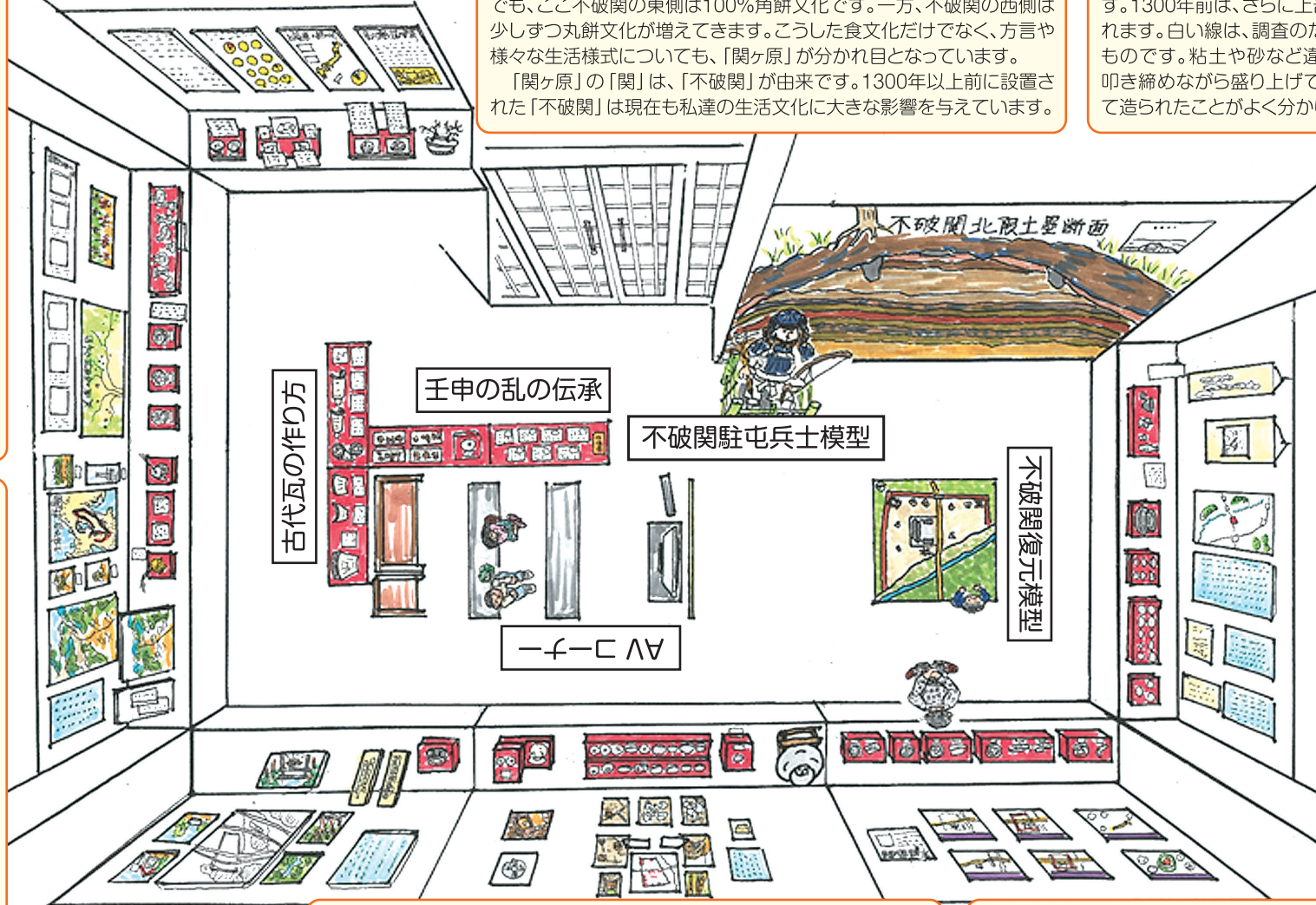
不破関が残ったわけ

789年、桓武天皇は関の停廃を命じましたが、不破関は同様に、主た建物を取り壊されませんでした。しかし、地元の住民は大海人皇子や大友皇子を祀る神社を建て、関を残すなど、壬申の乱や不破関の古跡を大切に守り続けました。また、平安時代から江戸時代にかけて、荒れ果てた関所を訪ねる貴族や文人がいたことも理由の一つです。

不破関の概要

昭和49年から53年にわたって岐阜県教育委員会が発掘調査を行い、不破関の概要が解明されました。面積約12万㎡、関の三方を土塁が囲んでいました。（西は藤古川の要害を利用）現在も残る北限土塁は長さ460mあります。関の中央を東山道が通り、その道沿いには100m四方の内郭があり、瓦葺きの役所が建てられていました。土塁の角には望楼的な建物もありました。広い敷地の中には兵士の住居や鍛冶工房もあり、日頃は軍事訓練もしていたのだと推測されています。

不破関資料館 館内展示図



プロローグ

関ヶ原は東西文化の分岐点と呼ばれています。例えば、お正月の「雑煮」は、西日本では「丸餅+味噌ベース」、東日本は「角餅+醤油ベース」が多いようです。その分かれ目が関ヶ原付近です。同じ関ヶ原町内でも、ここ不破関の東側は100%角餅文化です。一方、不破関の西側は少しずつ丸餅文化が増えてきます。こうした食文化だけでなく、方言や様々な生活様式についても、「関ヶ原」が分かれ目となっています。

「関ヶ原」の「関」は、「不破関」が由来です。1300年以上前に設置された「不破関」は現在も私達の生活文化に大きな影響を与えています。

北限土塁の断面

道路整備のため、数年前に北限土塁の調査が行われました。その時の断面写真です。

ほぼ原寸大で、底部は5.6m、最大高2mの土塁です。1300年前は、さらに上部に土塁があったと思われます。白い線は、調査のために土の種類を分けたものです。粘土や砂など違う種類の土を少しずつ叩き締めながら盛り上げていく「版築工法」によって造られたことがよく分かります。

停廃後の不破関

停廃後の不破関の様子を伝えるものに、関を訪れた貴族や文人の記録（紀行文・和歌・俳句など）があります。その多くが、朽ち果てて隙間から月が見える情景を伝えています。廃墟となった不破関は、都の人々にとって、特別な古跡の一つだったようです。また、時には、悪党や武士が住みつき、勝手に関銭を徴収していたこともあったようです。現在、関守跡を伝える三輪家の庭には、貴族や文人が詠んだ数多くの石碑が残されています。

不破関の変遷

発掘調査では数多くの瓦や土器が出土しました。軒丸瓦や軒平瓦は、その様式の違いから4時期に分類されています。また内部の建物跡からは時期の違う柱穴が見つかっています。このことから、不破関が存在したのは約100年間ほどでしたが、その間に数回の改築・増築が行われたことが想像されます。

不破関が、国家的軍事施設の性格を有していることから、改築・増築の契機は、天皇行幸がとが深く関わっていると考えられます。